

# わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 245 載

## 男性カップルから子どもができる?!

衝撃的なニュースが飛び込んできた。

何と、男性の細胞から卵子を作製、妊娠・出産にこぎつけた、というもの。いったい何をどうすればそんなことができるのか。とりあえず今はマウスの話。とても難しい内容だが、ものすごく簡単にいえば以下のようにまとめられる。

細胞の中にある染色体の中には、性別を決める性染色体が存在する。Xがふたつの「XX」なら女性、XとYがひとつずつの「XY」は男性となるが、この「Y」という染色体は加齢とともに消えてしまうことがある。マウスの尻尾から作った

iPS細胞を培養し、「Y」が消えて「X」1

本のみになった染色体を選別、ここに特殊な化合物を加えて「X」を2本作れば「XX」、つまり女性が誕生する。この細胞から卵子を作り、これをオスのマウスと受精させてできた受精卵をメスのマウスの子宮で育て、赤ちゃんマウスを出産させる。

iPS細胞が登場したのは17年前。画期的な発見の時から、このような事態は想定できていたという。今回はマウスの話だが、10年ほどの研究期間があれば人間への適応もあり得るとのこと。そうなれば、男性同士のカ

ップルから子どもが誕生するケースもおおいに期待できるといふわけだ。性の多様性を認める声や出生数の激減など、昨今の世の動きをみれば、男性の細胞から卵子を作り、それを使って子を成すという今回の技術は、もしかしたら広く受け入



れられるのかもしれない。もちろん、そこには倫理的な問題や家族関係のあり方などの課題が山積しているものの、日本の首相の言葉として定着した「異次元の少子化対策」の「異次元」とは、まさにこのような技術の登場であったかと、ただ唸る

ばかり。

思えば、「試験管ベビー」なる言葉が世間に流布したのは、1983年のことである。当時、体外受精（卵子を体内から取り出し、体外で精子と受精させて子宮に移植する方法）によって生まれた赤ちゃんをこう呼んだ。

世界で最初の成功例は1978年、イギリスのエドワード博士によるもので、この業績によってエドワードはノーベル生理・医学賞を受賞している。

当時は、自然分娩に比べ体外受精には眉をひそめる向きもあったが、今やそのような声を耳にすることはまずない。体外受精は、日本でも不妊治療として瞬く間に普及し、体外受精によって誕生した子どもは2020年単年度で6万人を超えた。これも前年度に比べて減少した、との結果である。私の友人も2人の子どもの

母親だが、2人とも体外受精によって出産している。

女性の社会進出に伴う出産適齢期の変化や子どもが欲しいという人間の欲求の方がはるかに勝った結果だろう。例えば今でも、「代理母出産」は世界各国で反対の声があったり日本では禁じられているにもかかわらず、実情は減るところかむしろ増加傾向にある。

生殖医療と呼ばれるものは多種に及ぶが、最初は不妊治療として、あるいは避けられない病気を理由としていたものが、そのあたりはなし崩し的になっていくのはどれも同じ。技術の進歩は法の整備を待つことなく、人々の果てしない欲望のうねりによって世界を席卷していく。これを人間の進化とみるか、あるいは退化とみるか。答えは、ない。

イラスト・伊藤香澄